

[脇・心霊講座から]

「憑依霊」と「地縛霊」(2)

霊の本質と向上性

われわれ心霊学徒が、心霊科学を学んだことによって、もっとも大きな収穫は何であったか。それは真実をいえる大宇宙の法則を知ったことである、ことにその法則のなかで、最も人間にとって必要な法則の一つに、「人間の向上性」がある。これを分かりやすくいえば、「霊魂そのものの向上」ということである。それは霊魂の本質が向上性を有しているからということになる。

ここで霊魂について少しおさらいをしておこう。

人間といえば、いうまでもなく<生きている生物>ではあるが、五官で見る限り肉体という物質である。物質である以上、死物ではないか。その死物が生きているというのである。それには何かの理由がなくてはならない。実はその死物に生命を与え、活動させているもの、これが実は霊魂なのである。

この霊魂の本質こそ前述のとおり向上性を具えている。もしもこの向上性に反したとすればどうなるであろうか。それは向下ということになる。その「向下」の霊魂の思考の全てには執着が籠められている。一口にいえば、かつての地上生活への執着である。たとえば、ある人に、あるいは、ある事物についている。それらにはすべて、感情に基づいて思いがよせられている。もっとも強烈なものは、死の瞬間にもっていた思いである。そして、それを持ち続けているのである。

この執着心が恐ろしいのである。この執着心がやがて、いや、その時から、その心の働きによって、間髪をいれず(その機を逸せず) 対象となる場所または事物に霊魂は憑く。そして、目的にあわせて、その執着心を具体的、あるいは抽象的に現す。これを心霊科学では地縛霊となって「憑依した」という。

人間の場合は、相手の心の波長と合ったところで憑依する。いうまでもなく、これが「憑依霊」といわれている霊魂の心の働き(作用)である。

このように「(執着心とは)恐ろしいのである」といったその意味はもう理解いただけたと思う。すなわち、これらの地縛霊、憑依霊の働きが、人生百般、地上の全ての不幸、不運、事故、全ての禍といわれているものの根原・因縁・因果律の原因となっているのである。

この恐るべき働きが、向上心が、霊魂の本質であることを忘れ、ただ、すべてに対

して「執着心」だけで考え、そして思う感情の虜となった時、その瞬間に地縛霊となり憑依霊となって、陰惨な幽界の一隅に幽閉するのである。しかし、その思いは憑いた本人を自由に操ると表現できるように、霊の思うがままに、憑かれた本人の身上、周辺に現れる。

なお、これらの憑依霊・地縛霊によって不幸、不運への歩みをさせられた実例は、わが国においても数多いため、ここで例証を示す必要もなからう。

また、その霊の働きは、日本のみにとどまらず、その人に従い、海外へ向かったとしても、そのままつきまとうのである。

憑依霊・地縛霊の働きの一例

これらの霊は必ずしも人間のみ働くわけではない。先年紹介した心霊資料のなかの一つに、ある医師の事例を紹介しておいた。概略はつぎの通りである。

その医師は中古の自動車を買って往診のため乗り回していたが、ある時人を轢いてしまった。その医師には轢いたという自覚が全くなかったが、周囲の目撃者の証言で、たしかに轢いたことが証明されて刑事問題となった。この医師は自分で人をひき殺したということにどうしても納得が行かず、といて、自分がひき殺している事実がある。そうこうしているうちに、この車の前の持ち主にただしてみようと言うことになった。すると、この車はアメリカ製で、現地で最初に購入した人が運転していて、やはり同様な状態で人を轢き殺してしまった。その車は売却され、日本に輸入されたのであった。そして今度も最初の買い主と同様の自動車事故をおこしてしまったという。（この記事は「日本医事新報」にも当時掲載された）

このような記録を集めた書物も日本には多い。とにかく、地縛霊の働きとともに、霊の憑依によってすべての不幸、禍が起きていることは、もはや心霊科学による理論をまつまでもなく確実である。

とにかく、今日の学者は、憑依現象をみて、その現象に立ち合っているいろいろな説をたて、あるいは太霊説を持ち出したりしてなんとか説明しようとする。このあたりはまだ良いとして、あくまでもし潜在意識、深層・無意識下ということに固執して、自我霊の働き、同一人格の分裂で説明できたとして、これ以外のメカニズムを理解できない。

しかし、事実は事実である。それほどに「例外」「例外」として無理に主張しなくとも、霊魂説は、人間の構造の2元的存在を認めることから、霊魂の働きによって、人間は生きていることを科学的に立証しながら、理論的に憑霊の事実を認めざるをえないことを説明しているわけである。

もちろん、私たちは、太霊説も、潜在意識も、無意識も、統合失調症など精神科的疾病も認め、それによって解明できればそれで結構。また、そういうことで生じたものを憑霊現象というものもあるということで、それらを含めて霊魂説としている。

“憑きもの”と人生

心霊科学の発達は、1848年以來、長足の進歩をして遂に霊魂の客観的存在までも立証した。さらに、この研究の偉大さは、この地上生活が、それらの霊魂との交渉によって成り立ち、地上の諸現象は起きていること、ことに幸、不幸の人生も、この霊魂の働きによることを明確に確認した。

これは、いわば憑霊現象によって、人間の将来が多分に影響を受けるという意味であることに、われわれは気づかなければならない。今回は「つきもの」に関わる広義・狭義の解釈、また霊の高・下ということについて、別途の各論的問題としたい。

ただ、ここで問題にすべきは、この憑霊の如何が、人間の幸福・不幸の分岐点になることである以上、その憑霊の本質に触れるべきである。一体何によってその憑霊の内容を知見することができるか。延いては如何にしてその憑霊を所置すべきかについてである。一般の人は憑依した霊魂、この憑きものをすべて「不幸への道」を展く、悪・邪霊のツキモノと解している。古来からも、この憑きものを悪邪霊視して、その除霊方法には一通りではない腐心をしてきたようである。そこにはいろいろな宗教行事、呪詛がある。心霊科学のなかった時代としては、さもあるべきことで、無理からぬことであつたと思う。

今日の人たちは、霊を認めないだけでなく、狐と言えは動物の生きた狐を考えるが、つきものの場合、その対象は霊魂であることを知るべきである。もはや今日では、近代霊魂学の発達で、生物は霊魂によって生きていること、なぜ霊魂が憑くのか、どうして憑いた霊魂が去ったのかが解明されて、その本質から内面機構まで判然としているのである。

憑霊を除くには(除霊)

憑依霊など、地縛している霊をいかにして除くべきか。

この解決についてもいろいろと世上で取りざたされ、その中で最も一般の人が頼りにしているといえるものはやはり宗教であろう。宗教教団には、それぞれの秘法とか神秘的に除霊する方法があるという。もちろん、この宗教の世界で、憑霊は神仏に祈ることによってのみ解決ができるように言うが、ある部分ではそうであるともいえよう……まことに簡単な憑霊の場合は、しかし靈魂の目的が強い信念の下に憑霊したものの場合は、とてもそんな方法くらいではわずかにしろ効果が生まれぬ事例は多い。

何といっても理想的な方法は、米国ウィックランド博士のように憑霊を霊媒に移して説得することであろう。しかしそれは良い霊媒によってのみ可能な方法なのである。

日本の霊媒の中には、自らの家系にまつわる因縁霊も所置することができない人も多い。まして自らの病気も治せないにもかかわらず、人の病気は癒せるなどと大語る不敵なエセ霊媒が、これまた多い。まだまだ死ぬ年齢ではないのに死ぬ霊媒もいる。そのような時に、「人の因縁を背負ったからだ」と血迷ったことを言い出す始末である。背負った霊の所置もできないような霊媒が、どうして人の病気が癒せるか、除霊できるか、と言いたい。この程度ではわが国の霊媒に解決（除霊）を委ねることは疑問といわざるを得ない。やはり波長説による心身の浄化が重要であるといえる。

こうしたことを考えるとき、われわれには一人の例外もなく守護霊が働いていてくれることを思うべきである。それにも拘らず、悪い意味の憑霊現象に悩まされている人たちがいかに多いことか。ここで考えるべきことは、なぜ各人の守護霊を大いに働かせないのかが問題なのである。言うまでもなく、霊との関係は一つの例外もなく、「波長説」によっている。こればかりは神仏でもどうにもならない決まりである。いや、その神のうちの創造神がその波長説によって人間を向上させようとすることを意図として定めたからである。（ここにも正しい信仰への道が示唆されているというわけである）

これらの憑霊現象も当然のことであるが、人生すべてを宿命づけているし、また運命を支配しているといえよう。ただ憑霊と聞いて驚き、おそれる前に、その憑霊の原理を知ることが、憑霊への除霊への一歩でもあり、整調でもある。ぜひウィックランド博士の「死者に交わる三十年」の一読を望む。

なお、この除霊の原理について……

「現代人のほとんどは適当な、靈魂の向上のための祭祀等を閑却していることも、たしかに不幸・災害の原因の一つをなしている。ばい菌ならば殺菌剤をぶっかければよいが、迷える亡者、怨霊、その他地縛の霊たちに対してできるだけこれを善導し、

済度してあげるより外に、絶対にこれと絶縁すべき方法はない。これをやらないでいたずらに国家、社会、人生の安寧幸福を望んだところで、到底できない相談である。

こんな次第で社会、人生を、まず幾多の不幸災厄も、実は大部分が自業自得の産物であって、そこに何らの偶然、何らの不公平もないのである。」

とこれは浅野和三郎先生の名著「心霊研究とその帰趨」の一節である。

全く、浅野先生は、今日の世相、とくに悲惨事を見通されての、世人への猛省を促しているのであるといわざるを得ない。

これらの事を要約すれば、われわれの日常はあくまでも 心身の浄化、 霊的の整理によって、自分と共に背後霊の向上を図ることにつきるのである。

どうかすると、世の中の一部の人たち、ことに宗教界の人々の多くは、これらの事を無視して、楽で他力的な神仏に依存している。あるいは、霊媒者によって、除霊させようとしている。これはとんだ誤りである。

ここで特に強調しておきたいことは、自分に関するかぎり、自らの反省を以て、自主的・自律的に心身浄化を心がけ、除霊の対象となるものに対しても、自らと共に向上進歩を計るべきである。